

救護第14班 4月4日～4月11日 薬剤師・岩田 一史



瓦礫の撤去は、車両がやっと通れるくらいになっていました。鳴瀬庁舎の救護所のテントの中で薬を処方。在庫は不足してはませんが、診療所がない薬は石巻赤十字病院で一括して請負い、各診療拠点に配達する態勢でした。時折漏れるトラブルはありましたが。



避難所では、不安で眠れないという患者も多く、睡眠薬や安定剤は切らさないようにしていました。

震度6強の余震の後、夜中に病院に100人くらいが押し寄せ、列をなしました。外傷の患者はおらず、風邪気味やだるいなど。実際に処置が必要な患者は3～4人だったそうです。その日は旅館にいて、病院のテント班に応援が必要かどうか連絡しましたが、翌日でいいという返答でした。

震災からもうすぐ1カ月という時期で、被災した方も落ち着いてこられたようで、「連れ合いが流された」と淡々と話せるように。処方した薬も比較的冷静に受け取っておられました。街の機能はまだ残っていましたが、2回目の余震の後また一時的にライフラインがストップ、特に水道の復旧が遅れてトイレに困りました。

した。

現地ではいつも揺れている感覚がありました。帰郷して揺れない自宅で静かに眠れて、やっと落ち着けました。